Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo

広島大学　グローバルインターンシッププログラム

NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム（G.ecboプログラム）
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

第11号　Vol.5 No.1

2012年10月

目次:

現地HOT NEWS（ネパール） リスク管理体制	1-2
就職活動体験記	3-4
2011年度冬期派遣学生帰国レポート	5-7
活動報告＆予定	8

10月31日（水）、合同留学体験報告会が行われます。

今年度ネパール環境局へ派遣された大木健司さん（国際協力研究科M1）が発表予定です。

＜場所＞
学士会館2Fレセプションホール
＜時間＞
18:00～20:00

現地HOT　NEWS（ネパール）　～*Latest news from Nepal*～

末竹　誠　Makoto SUETAKE　（国際協力研究科M2）
●ネパール・FORWARD派遣
（Forum for Rural Welfare & Agricultural Reform for Development）

インタビューの様子1

FORWARD Nepalは食料安全保障、所得の向上などを行い、地方の人々の基本的なニーズの充実を目指すNGOです。ここで私は実際の現場を見ることと、私の研究のフィールド調査の2つを行っています。まず、ひとつ目として私はSIFS (Sustainable Integrated Farming System)というプロジェクト現場に行きました。このプロジェクトは農業の生産性の向上、栄養不良を防ぐために新たな食料生産を促すこと、マーケットアクセスの向上など様々な点で支援を行っています。

Nangi村での見送り
無事に帰れるように、との願いが込められた花の首飾りとブーケをかけて頂きました。

私の行ったところでは具体的にはまず地域の人々でどんな資源があって、どういうことを求めているのかを話し合ってもらいます。それをもとにNGO側よりこういう作物を植えると栄養のバランスがよくなるといった情報提供で人々に気づきをもたらし、技術的な支援等を行うというものです。人々の意識改革から取り組んでおられ、FORWARDの方も一番難しいのは“私たちがこの地を離れた後に人々が続けていくこと”と仰っておられ、援助の本当の難しさを感じました。

裏面へ！

G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、
既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

2つ目に私は携帯電話やインターネットがどのように人々の生活の向上につながるのかを調査するためにNangi村という所で訪問調査をしています。調査表の内容がこのままでは不足しているのではないかと途中で感じたり、回答することをためらう人がいたり、通訳の人との意思疎通がうまく行かなかったりと困難がたくさんありました。しかし、地元の人々の家に招待されてご飯を頂いたり、おしゃべりしたり、地元の名産品のネパール紙の生産を手伝わせてもらったりしてとても楽しい時間を過ごせました。また、ネパールでの名前としてTikaramと付けて貰い、私のアナザースカイとなりました。

インタビューの様子2

これからまた気を引き締め直してふたつ目のリサーチエリアに行ってきます！

Nangi村からの風景・ダブルレインボー

この夏FORWARD・ネパールに派遣されている国際協力研究科の末竹くんの近況レポートをご紹介します。
調査地のひとつであるMyagdi地方のNangi村は標高2300m。6時間ものトレッキングをして到着しました。
たくさんの人々と会話をし、濃い時間を過ごしているようです。大自然の中リフレッシュしながらがんばっています。Good Luck!

リスク管理体制の強化

7月11日国際協力科大会議室にて、昨年度より二度目となるG.ecboリスク管理セミナースペシャルセッションを実施しました。

G.ecboプログラムに選考された派遣生たちは、「一人で」「長期間」、主にアジア・アフリカといった「発展途上国」へと旅立ちます。派遣中に事件や危険に巻き込まれるリスクを減らし常にリスク管理の意識を持ちつづけてもらう為、先輩派遣生の体験談、相談会を行っています。

最近は日本人を狙った犯罪が多く発生する傾向があります。派遣地への深夜到着をしない、派遣先では危険な場所に近づかない、夜間の外出には十分注意する等、グループメールやfacebookを通じて注意喚起を行いました。

大学主催リスク管理セミナー

G.ecboリスク管理スペシャルセッション

就職活動体験記1

田中　健太（広島大学大学院国際協力研究科2013年3月卒業予定）
●東京都庁　内定　（派遣先：JICAマカッサルフィールドオフィス）

「世界のために何かしたい」こう考える人はたくさんいると思います。私はその方法は2つあると思っています。ひとつは直接的に世界で働くこと、そしてもうひとつは世界に伝えることができる素晴らしさを育て続けることです。これは、昨年参加したG.ecbo海外インターンシップから感じたことでした。

1か月間インドネシアで過ごしたインターンシップは、日本と世界のつながりを体感する初めての経験でした。
受け入れ先であるJICA MFOでは、日本の行政機関が、自国では解決しきれない課題を抱える国と、その解決力のある日本の技術をつなぎ、共にプロジェクトを遂行するたくさんの現場と出会うことができました。日本の技術や取り組みが、世界に広がり他国を支えている、このことに誇りさえ感じました。
インターンシップでは人との出会いにも恵まれ、たくさん現地の友人ができました。どの人もみな親日的なことに驚き、尋ねると「戦後日本は私たちの国のためにたくさんの支援をしてくれた。それにみんな感謝しているし、日本の歴史文化やアニメがとても面白いから好きだし憧れがある。」という答えが返ってきました。
国際協力という国家間のつながりが、ひとりひとりの若者にまで広がっていることの素晴らしさが実感できました。そして、「国際協力って日本が持つ良さを伝えることなのかな。」という私なりの考えを持ちました。

就職活動を始めると、これまでの経験を生かし世界のために何かしたいと考えました。しかし同時に、国内にも目を向けなくてはならないと感じていました。それは、今の日本を見ると防災やエネルギー政策、高齢化問題など多くの課題を抱え、元気を失っているからです。そんなとき、冒頭の言葉が浮かびました。世界に日本の良さを伝えるならば、その発信源がいつまでも成長し続けなくてはならないのではないか、そう考えるようになり、私は今日本が抱える課題に取り組み、世界に誇れる日本をつくりたいという思いが強まりました。そして見つけた答えが日本の首都東京都で行政職員として働くことです。東京都では、各地に先駆けた取り組みを実践的に行え、またその技術を生かした国際貢献にも取り組んでいるという実績もありました。私が働く先にはきっと、共通の課題を抱える他国のためにもなるという夢が見えたことが決め手でした。私はこれから、“東京のため”の先に“世界のため”がつながっていることを意識し、働いていきたいです。

2012年度TAの紹介
自らの経験知を各研究科の後輩へ引き継ぎ、事前・事後研究および海外インターンシップの相談役を務めるなど、G.ecboプログラムを支えてくれています。

英語事前プレゼンテーション研修　－　Ahmad Sajjad (Spring/Winter), Toe Doris Hooi Chyee (Spring/Winter), 山内優佳　Yuka Yamauchi (Spring/Winter), Stewart Rodney (Spring),
能力開発特論（Developing Designing Ability）－ 大矢祥平　Shohei Ohya (Spring)

就職活動体験記2

延川　裕樹（広島大学大学院国際協力研究科2013年3月卒業予定）
●兼松株式会社（総合職）　内定　（派遣先：ケニヤッタ大学）

私が内々定を頂いたのは４月１３日であった。修論の調査で３月２４日までケニアに居たので、３週間程で就活を終えた。
優秀ですねと声を掛けてくださる方もいるが、自分を優秀だなんて思ったことはない。そもそも「働く」とはどういうことなのか。稚拙な頭で辿り着いた答えが、「途上国の発展に貢献する」という夢の実現であった。もちろん、大学院での経験が大きいのは言うまでもないが、何とも大きく、わかりにくい答えが頭に浮かんだ。

ケニアに行くチャンスを手にいれたのは入学して間もない頃であった。G.ecboインターンシップに応募し、ケニヤッタ大学行きのチケットを手に入れた。初めてのアフリカということもあり、胸を躍らせながらケニア行の準備をしていた。これをきっかけに調査する国もケニアに決定し、現時点では数えて4回、ケニアを訪れたことになる。調査の関係でケニアの方々と話をすることは楽しかった。初めてのケニア訪問時に教員ストライキにあった。ストライキが明けて直ぐの学校訪問は骨の折れる作業であった。
ケニアではあらゆる活動をするときに書類での申請が重要な意味を持つ。その資料を基に担当者に説明をすることで、担当者がボスと掛けあってくれる。かなり長い道のりである。私は学校訪問のために提案書作りから趣旨説明に精を注いだ。努力が報われ、学校訪問が実際にできた時は喜びの瞬間であったといえる。
学校に着くと、教員たちはとても気さくであった。握手とハグで迎えられ、家族のように私を気遣う質問攻めにあった。毎日1回は「元気か。困ったことはないか」と電話をくれる先生も居た。その電話代を抑えれば、もっと楽な生活ができるだろう、と内心は思っていたが、その優しさは純粋に嬉しかった。
気が付けば、現地の方々とコミュニケーションをして仕事をするのは良いだろう、という感覚が芽生えていた。 日本ではどちらかと言えば人見知りに分類される私だが、海外で英語を使う環境になると、心がオープンになっている。拙い英語だが、コミュニケーションを取っている時間が楽しい。この発見が就活時の会社選びで影響したのだろうと今は思っている。

無数にある企業の中から、縁ある会社に出会うには、優秀である前に「自分」を知り、会社選びの作戦を立てることが何よりも重要なのだろう。心が高揚する環境に巡り合えたことが私の就職活動に有利に働いたのかもしれない。

ケニヤッタ大学ヴィンセント先生が広島大学を訪問されました。

滞在中、ケニヤッタ大との交流プログラムでお世話になった学生と交流会が開かれ、G.ecboからは延川さんが参加しました。

2011年度冬期派遣学生　帰国レポート/Internship Report from interns

和栗　佳代　Kayo WAGURI（国際協力研究科）

Host	グラミン・シッカ （バングラデシュ）
Period	2012年2月19日－3月27日
Objectives	修士論文の事前調査として、バングラデシュの青年期女性の進路形成に関する情報収集を行う。

バングラデシュは今回が初めての訪問であったため、最初は戸惑う場面も多かったが、日本と異なったイスラムの慣行や食生活、生活様式を体験できたことは、大変貴重な経験であったと思う。特に印象深い点は「紅茶文化」である。イスラム教徒が大半を占めるバングラデシュでは、お酒を飲むという習慣がなく、その代りに紅茶を1日数回は必ず飲む。道路の脇には紅茶の露店が並び、そこは人で溢れ、会話が絶えない。日本ではお酒がコミュニケーションの手段として用いられるが、バングラデシュは紅茶がその役割を果たしている。また、客には紅茶をご馳走するという慣行があるらしく、一人で露店に立ち寄って紅茶を飲んだところ、他の見知らぬお客さんが私の分の代金まで知らぬ間に払ってくれていた。バングラデシュの人々はおもてなしの心が深く、温かみを感じた。

また貧困問題の深刻さも改めて痛感した。道を歩くと必ず物乞いをされたし、リキシャワラ(リキシャを運転する人)は、驚くほど細い人が多かった。ゴミ捨て場に人が集まり、ごみを漁っている様子も目撃した。しかしながら、他方では、高級店のショッピングバッグを肩にかけ道を闊歩する人や、高級車を運転する人も見受けられ、バングラデシュ国内の貧困格差を実感した。

インターンではグラミン・シッカ職員の方の協力があり、なんとか初めての調査を行うことができた。しかしながら、事前準備が不十分であった点は、反省すべきであると思う。次回以降は、事前準備をしっかり行うようにしたい。

全　麗清　Quan LIQING（国際協力研究科）

Host	Grameen Shakti （バングラデシュ）
Period	2012年2月12日－3月15日
Objectives	1) The role of private sectors especially GS in promoting Solar Home System for rural electrification, and further explores its features and possibility of being replicated in other countries 2) Comparison study on factors affecting decision-making of with and without SHS household for further dissemination.

It was a wonderful experience for me. From documentary material reading and interview with some important persons I got the general picture of Bangladesh and Grameen Shakti (GS), which is helpful to my fieldwork. Through field survey the general picture of rural life becomes lively and impressive, and the understanding of role of GS as a private player in promoting Solar Home System for electrification in rural area of Bangladesh. Affordable microcredit payment options, good quality guarantee and after-sale services, and local assembling, repair, maintenance and accessories' producing in Grameen Technology Centers which further assure low cost and timely service are the main features of GS. The survey to with and without SHS household gives me comparison information of the factors affecting different households decision-making for further diffusion of Solar Home System (SHS) in rural Bangladesh.

There are still something need to improve. The most noteworthy thing is the training and communication with interpreter before and during working which is critical to the quality and efficiency of the survey. Another important thing is better arrangement and controlling the steps by ourselves rather than waiting for being arranged, which will make the survey more efficient.

2011年度冬期派遣学生　帰国レポート/Internship Report from interns

今野　香織　　Kaori KONNO（国際協力研究科）

Host	グラミン銀行　（バングラデシュ）
Period	2012年1月19日－2月16日
Objectives	1)インターンシップを通して、今後の研究への検証を行う 2)ムスリム社会における女性のエンパワーメントメソッドの検証

今回のインターンシップでは、バングラデシュ現地の方と接する機会はもちろんのこと、欧米人を中心に様々な国籍の方と接する機会がありました。この経験より、従来から海外で学ぶこと、働くことに対して強い関心を抱いていたのですが、その気持ちが更に強くなりました。また、今回バングラデシュという、長年日本が支援を行ってきた国を訪問し、現地の方とお話することによって、日本の国際的評判についても詳しく知ることが出来ました。特に、今回インターンシップを行ったグラミン銀行とその関連の団体では、日本企業との連携が多数あり、お話の中で日本の企業の貢献について伺う機会が多数ありました。従来、JICAやODAなどの政策的側面に比重を置いて国際社会への貢献を考えていたのですが、今後は企業という別の観点から、国際社会への貢献を考える必要があると感じました。また、今回のインターンシップでの研究においても同様のことが言えると思いました。従来、エンパワーメントという側面から考えると、企業という要素が考慮されるケースは多くなかったと思いますが、企業のエンパワーメントへの貢献という側面も考慮していく事が重要であると感じました。特に、日本の場合は世界有数の経済大国としてバングラデシュの人々からだけでなく、欧米の方からも認識されており、その要である企業がグラミン銀行や関連企業と協働するインパクトは大きいと感じました。今後、国際社会を考えていく上では、グラミン銀行などのソーシャルビジネスを行っている企業はもちろん、一般の企業の活動についても考慮していく必要があると感じました。

私は今回のインターンシップが旅行以外で海外に滞在する初めての機会だったのですが、語学力などテクニカルな側面で一層の努力の必要を痛感し、今後より一層語学に力をいれていこうと感じました。

今回のインターンシップの経験を通して、本来の目的である自身の研究についての目的を達成した事はもちろんですが、それに加えて、多数の国の方とコミュニケーションを取る事が出来、海外への興味関心を更に高める事が出来たという国際交流の側面は、私の4週間のバングラデシュでのインターンシップでの成果の一つであると言えます。

國光　薫　　Kaoru KUNIMITSU（総合科学研究科）

Host	グラミン銀行　（バングラデシュ）
Period	2012年2月1日－3月8日
Objectives	融資サービスだけでなく、衣・飲料・教育サービス等の多様なサービスを展開するコングロマリットとしての側面を持ち合わせているグラミン銀行が、債務者に対してどのような機能を果たしているのか、また資本主義路線のバングラデシュにおいてどのような変化を求められうるのかを考察する。

この度は貴重な機会を頂けたことに深く感謝申し上げます。私は常に「社会貢献」を心に念じながらプログラムを受けていました。本プログラムで培った知見、またバングラディシュで出会った友人を大切にし、これからの日本を豊かにできればと強く想っています。

【次期受講生へのアドバイス】

渡航国に関する具体的問題や研究について、あらかじめ目を通しておくことをお勧めします。ただでさえ2ヶ月以内の短い期間ですので、現地に着いて「さあ情報収集」では滞在先での時間の過ごし方を非効率にしかねません。短い期間の中で多くのことを知るために、あらかじめ調べておいた方が良いと考えます。

誰でも・いつでも・どこでもできる自己満足な研究をするのであれば時間の無駄なのでしない方が良いと考えます。「役に立つ研究」を頭がねじれるまで考え抜いてください。

2011年度冬期派遣学生　帰国レポート/Internship Report from interns

楢木　陽子　　Yoko NARAKI（国際協力研究科）

Host	ケニヤッタ大学・教育学部　（ケニア）
Period	2012年2月17日－3月23日
Objectives	大学内での障害児教育に関する授業・活動内容の把握、およびケニア（ナイロビ市・ナクル市）における障害児・障害児教育の現状把握

今回このG.ecbo海外インターンシップを通して、私はこれまでに経験したことのないような貴重な体験をたくさんさせていただきました。想像していた以上に発展していたケニアの都市や、思っていた以上に陽気で優しいケニアの人々、雄大で広大な自然と気候、そのどれもが私にとってとても新鮮で、日々新たな発見や感動が本当にたくさんありました。また時には、これまで日本で学び、勉強してきたケニアと、実際のケニアの現状に大きなギャップを感じることもありましたが、それもまた私にとって大きな学びだったと思います。今後これらの経験を自身の修士論文、またそれ以外でも生かしていきたいと思っています。

【学校訪問の感想】

●訪問した全ての学校でインテグレーションは実践されていたことに驚いた。また、通常学級に統合される児童は、児童の年齢ではなく、能力に応じて各クラスに統合される（例えば、1年生の学級に10歳、11歳の知的障害児が統合されるなど…）。日本では考えられないことではあるが、入学時期の遅れや留年のあるケニアでは、当たり前であるということを痛感した。

●インクルーシブ教育を実践している学校で、先生方もインクルーシブ教育に関する研修を受けていても、先生によって‘インクルーシブ教育’の解釈、考え方は異なり、それぞれインクルーシブ教育（子供への指導や支援の方法）への取り組み方も違った。そのため、子どもの意識（インクルーシブ教育や障害時に対する意識）も各クラスあるいは、各個人によっても差があるように感じられた。

●今回訪問させて頂いた学校は全て公立の小学校、特殊学校であったが、同じ公立であっても、学校教材や教員（公認の教員、保護者によって雇われる教員（teacher-aids、ボランティアスタッフ等）、スタッフの数など学校間で大きな差が見られた。今回、私立の学校は見学出来なかったのだが、私立の学校においてはさらなる格差がみられるのではないかと感じた。

2012年度G.ecboインターンシップ派遣学生（各研究科専門ECBO除く）

今年度は10名の海外インターンシップ派遣学生が選考されました。また各分野でも専門分野におけるインターンシップ募集が行われました（計26名）。また、冬期の追加募集も決定しました。

氏名　Name	所属研究科	学年	派遣機関
金藤　冬樹　Fuyuki Kaneto	理学研究科	M1	ロシア科学省ウラル支所（ロシア）
尾場　友和　Tomokazu Oba	教育学研究科	D2	フロリダ州立大学（アメリカ合衆国）
中島　浩美　Hiromi Nakashima	国際協力研究科	M1	フロリダ州立大学（アメリカ合衆国）
末竹　誠　Makoto　Suetake	国際協力研究科	M2	FORWARD（ネパール）
Aleksandar Radosavjevic	国際協力研究科	M1	UNDP（東ティモール）
西田　孝史　Takashi Nishida	国際協力研究科	M1	ICLEI（フィリピン）
上原　亜由美　Ayumi Uehara	国際協力研究科	M1	アルメック（ベトナム）
下山　知久 Tomohisa Shimoyama	国際協力研究科	M1	West Java Environmental Protection Agency（インドネシア）
大木　健司　Kenji Ohki	国際協力研究科	M1	ネパール環境局（ネパール）
田坂　尚子 Takako Tasaka	国際協力研究科	M1	ケニヤッタ大学（ケニア）

活動報告

2012年度上半期（4月-9月）

4月4日	G.ecbo Day：プログラム募集説明会
4月13日	合同留学体験報告会（発表者：田中健太さん）
4月23日	海外インターンシップ募集締切り
4月25日	遡上教育型インターンシップ帰国報告会
4月27日，5月1日	2012年度派遣選考面接
5月14日，16日	英語プレゼンテーションガイダンス
5月17日	留学WEEK報告会（発表者：大矢祥平さん）
5月23日-25日	第1回英語プレゼンテーション研修
5月31日，6月7日，8月3日	2011年度冬期派遣学生帰国報告会
6月20日，22日，25日	第2回英語プレゼンテーション研修
6月26日	リスク管理セミナーを開催（全学対象）
7月11日	リスク管理セミナースペシャルセッション
7月18日，20日，23日	第3回英語プレゼンテーション研修
7月23日	教養科目「国際協力を考える」発表（発表者：板谷憲志さん）
7月27日	能力開発特論：オープンディベート
7月31日	遡上教育インターンシップ申請締切り
9月12日	

教養科目「国際協力を考える」

能力開発特論～オープンディベート

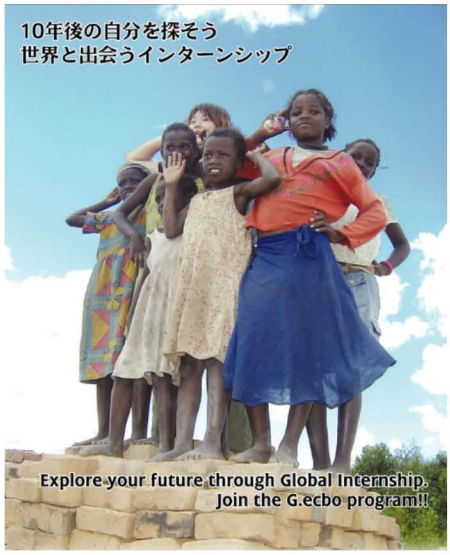
活動予定 2012年度後期
＜9月-3月＞

夏期インターンシップ派遣
（2012年7月～2013年2月）
派遣先教員訪問
（アメリカ、ベトナム、フィリピン、インドネシア、東ティモール）
ニューズレターvol.5 no.1発行
合同留学体験報告会（10月後半）
追加募集・遡上教育型インターンシップ選考（11月）
帰国報告会（10月後半～11月）
後期事前研修開始（11月～）
リスク管理セミナー（12月予定）
冬期インターンシップ派遣（2～3月）
ニューズレターVol.5 no.2発行

編集後記

今年度は春に10名が選考され、この夏には9名の学生が研修先へ派遣されました。近年日本人を狙った犯罪も多く、事務局ではリスク管理に力を入れてきましたが、この夏は大きな病気や事故もなく、派遣先から届く元気なレポートにホッとしました。G.ecboプログラムも創世期から成熟期へと移行しているところですが、新規の受け入れ先を募集しつつ、一層の充実を図っていきます。

（G.ecbo事務局K）



Global Explorers to Cross Borders G.ecbo

広島大学 教育・国際室
G.ecboプログラム事務局（学生プラザ3F）
電話 082(424)4551, 4581, 6950
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp

ホームページもぜひご覧下さい。
http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html